滋賀県における朝鮮人強制動員の記録(2)
―韓国における生存者の聞き取り調査より―

河　　かおる
人間文化学部国際コミュニケーション学科

1．はじめに

本稿では、前号に引きつづき、2012年８月末に実施した「対日抗争期強制動員被害調査および国外強制動員被害者等支援委員会」との共同調査による、滋賀県に強制動員されていた韓国人生存者の聞き取り調査結果を報告する。

本号では、前号掲載表２の６番のKJ氏への聞き取り調査結果を報告する。

2．八日市飛行場と第８航空教育隊（中部第98部隊）

KJ氏は、事前情報により、「中部第98部隊」所属で、動員類型が「軍人」であったことが分かっていた。そこでまず、中部第98部隊および同部隊が駐屯していた八日市飛行場について概要を整理しておく[1]。

1）八日市飛行場

八日市飛行場は、秦荘町出身の退役軍人の飛行家・荻田常三郎が1914年に沖野ヶ原の広場を利用して初飛行したことがきっかけとなり、八日市町長や町会議員が中心となって沖野ヶ原飛行後援会を結成し、民間飛行場として整備されたことに始まる。その後、町長および県知事の働きかけにより航空第３大隊が設置されることになり、1922年に開隊式が挙行された。

八日市飛行場では、1940年から民家の強制立ち退きを伴う敷地拡張が行われた。この拡張工事作業（特に墓地の移転）には最も多い時には千人もの朝鮮人の労働者が従事していたという証言がある（中島隆　1993）。

また本土空襲が始まると、空襲から飛行機を守るため、布引山に掩体壕が掘られた。この掩体壕の造築にも朝鮮人労働者が関わっていたとされるが、実態は明らかではなく、請け負った建設業者に雇われた労務者であったと思われるので確認も難しい。ただ、第一復員省作成「本土配備部隊行動概況表」[2]によると、京都師管区隷下の第113特設警備工兵隊（通称号・中部4181）が1945年４月21日に結成されて「八日市付近の掩体壕構築」をしていたことがわかる。この部隊が朝鮮人による部隊であったかどうかは不明である[3]。

実際に飛行場の空襲被害についてだが、1945年７月24日早朝、御園地域に空襲（ロケット弾の投下、機銃掃射）があり、御園国民学校を兵舎としていた兵士１名、学童１名が死亡、消防隊員など数名が重軽傷を負ったとされるが、飛行場内を含め、もっと犠牲が多かったと推測される（水谷2009）。

敗戦後、飛行場の飛行機、兵器類は進駐した米軍に引き渡され、第８航空教育隊（中部第98部隊）も1945年９月５日に復員となった。中部第98部隊の兵舎はそのまま玉園中学校の校舎となって1961年まで使用されていた。

2）第８航空教育隊（中部第98部隊）

次に第８航空教育隊（中部第98部隊）について述べる。

1938年に八日市飛行場で編成された飛行第３戦隊は1942年に青森県八戸に移駐し、入れ替わりに第104教育飛行連隊（中部第94部隊）および第８航空教育隊（中部第98部隊）が順次転営してきた。第８航空教育隊は、整備・手入れ・加修などの地上要員に必要な教育を目的とした部隊で、ノモンハン戦当時、満洲牡丹江省海浪飛行場で第２飛行集団の改組に伴い1939年に編成された部隊である。三船敏郎が1943年から終戦まで写真工手として在隊していたとして知られている（中島伸男2008）、この第８航空教育隊が、KJ氏が所属することになった中部第98部隊である。

第８航空教育隊について言及のある文献の記述が、不正確であったり文献によって異なっていたりするので、KJ氏と直接関わりのある時期以外も含めて、防衛研究所が公開している陸軍省の史料に基づいて確認できたことを以下に整理する。

陸軍省調製「軍令陸甲第19号　陸軍航空部隊編制」（1939年６月）[4]によると、第８航空教育隊は第２飛行集団・第８飛行団隷下にあり、３中隊編成で兵70、修業兵250から成っている。位置情報は同史料からは不明であるが、この時点では海狼にあったと思われる。

陸軍省調製「軍令陸甲第25号　陸軍航空部隊編制」(1940年７月)[5]によると、第８航空教育隊は第１飛行集団・第102教育飛行団隷下にあり、位置はこの時点で既に八日市となっている。５中隊編成で、１中隊は兵70、修業兵250から成っている。部隊通称号は中部第98部隊である。

陸軍省調製「航空総軍編制人員表」(年月不明)[6]によると、第８航空教育隊は第１航空軍・第51航空師団・第２教育飛行団隷下にあり、1943年４月までに９中隊編成に改編したことがわかる。この史料からは1942年４月～1943年12月の間の人員編制しかわからないが、1943年４月には約1800名規模だったのが、同年12月には2800名規模になっている。通称号は「中部98」のほかに「576」の記載もある。

中島伸男(2008)で紹介されている第８航空教育隊在隊者の証言によると、1944年11月ごろの時点で第８航空教育隊には10中隊があって、１中隊の兵員は60名程度であったが、1945年に入ると毎月現役兵が入るようになり、1中隊が10～15班で編成されるようになったそうだ。そのため寝台が不足し床に藁布団を直接敷いて起居するようになったという。ちょうどKJ氏が八日市に来たのが、この現役兵が続々入隊してきたという頃で、後述するように、KJ氏以外にも多数の朝鮮人現役兵が含まれていた。

聞き取りの中で、KJ氏は特攻隊が乗る飛行機の整備をしていたと述べているが、八日市飛行場は、九州方面に向かう特攻隊の燃料補給や機体整備のための中継基地として使われていた[7]。それだけでなく、八日市飛行場に駐屯した第４教育飛行隊(旧・第104教育飛行連隊)に配属され特攻兵士となった土田昭二氏の記録[8]もあるように、八日市飛行場で編成される特攻隊もあったようである。また、1945年７月に飛行第244戦隊が知覧から移って来たが、この部隊は沖縄戦の特攻機援護を担当していた戦隊で、沖縄戦終結とともに八日市飛行場に転進し、そのまま敗戦を迎えた。このように敗戦間際の時期、八日市飛行場も特攻隊と深く関係していた。

３．朝鮮人の徴兵

KJ氏が中部第98部隊に所属していたという事前情報から、入隊経緯は学徒兵、志願兵、少年飛行兵、徴兵などいくつか考えられるものの、1924年という生年より、徴兵ではないかと推測していたが、聞き取りをしてみると、やはり徴兵であった。朝鮮人の徴兵については前号で既に書いたので、重複を避けつつ、本号のインタビュー内容を理解するために必要と思われる事項を確認する。

１)朝鮮青年特別錬成制度

KJ氏は、その生年月日から、1944年４～８月の第１回徴兵検査の対象者である。聞き取りでは、同期間内に(いつかは確認できなかった)徴兵検査を受け、甲種合格で、同年11月に召集を受けたということがわかった。さらに召集を受けるまでの１年間「トクレンタイ」で訓練を受けたと述べている。この「トクレンタイ」は、朝鮮青年特別錬成制度と関連があると推測されるので、以下、樋口雄一(2001)に依拠して同制度について確認する。

徴兵制度実施当時、朝鮮での初等教育普及率は、徴兵対象年齢の男子で２割強に過ぎなかった。しかも、徴兵より先に始まっていた労務動員も有学歴者を対象にして動員していたため、徴兵対象者として朝鮮に残っている朝鮮人青年男性の大部分が初等教育を修了しておらず、従って当然日本語を理解できないという状況にあった。

日本語を理解できない者を軍隊に入れれば訓練も成り立たないが、かといって日本語を理解できない者を徴兵しないとなれば制度自体が根底から崩れるため、朝鮮総督府は徴兵対象年齢層の朝鮮人青年を早急に「錬成」する必要に迫られた。そうして実施されたのが「朝鮮青年特別錬成制度」である。

1942年10月１日、朝鮮青年特別錬成令および同施行規則が公布され、11月３日、「明治節」を期して施行された。初等教育を修了していない朝鮮人青年男子を対象に、期間は原則として１年、場所は大半が国民学校内で、指導員も教員であった。1942年度の場合は、同年12月から翌年９月30日までの10ヶ月に期間が設定された。

さらに、1944年になると、朝鮮青年特別錬成所(または青年訓練所)に「別科」を設置して、初等教育修了者を対象とした訓練が開始された。KJ氏は初等教育を修了したとのことなので、訓練を受けたと述べている時期や期間から、この「別科」で訓練を受けていた可能性が高いと思われる。

前号では、徴兵検査ののち、甲種合格で現役徴集されなかった者や第一乙種を中心に第一補充兵とさ

れ、そこから日本語が理解できなくてもできる「本土決戦」準備用の「自活隊」や「農耕隊」への召集が1945年初頭から始まったと述べた。

KJ氏の場合、甲種合格で1944年11月末に召集されたと述べている。初等教育を修了して日本語が理解でき、かつ「トクレンタイ」の訓練も受けていたので、甲種合格者の中でも早めに召集がなされ配属が決まったと考えられる。

2）航空教育隊と朝鮮人

KJ氏は中部第98部隊すなわち第8航空教育隊に所属していたのだが、前号掲載の表1を見ると、KJ氏と同じ部隊にいたと申告している人は他に3名いる。これは本人または親族の申告に基づいたものであるので、申告していない人は当然ながら含まれていない。

そこで、国家記録院「日帝強制動員者名簿コレクション」[9]を用い、表1、表2を作成した。表1は「兵籍戦時名簿」、表2は「臨時軍人軍属届」の名簿情報に基づいており、両者は重複している可能性があるが、見たところ13番と40番が同一人物と思われる以外は重複が無い。従って、これらの名簿情報から、少なくとも50名以上の朝鮮人がKJ氏と同じ部隊に所属していたことがわかる。また、「兵籍戦

表1　「兵籍戦時名簿」に見られる中部第98部隊（第8航空教育隊）所属の朝鮮人

#	本籍地		出生年度	動員地
	道	郡		
1	京畿道	開城	1924	第8航空教育隊第1中隊
2	京畿道	仁川	1924	第8航空教育隊第1中隊
3	京畿道	漣川	1924	第8航空教育隊第7中隊
4	京畿道	漣川	1924	第8航空教育隊第7中隊
5	京畿道	江華	1924	第8航空教育隊第7中隊
6	京畿道	京城	1924	第8航空教育隊第9中隊
7	京畿道	京城	1924	第8航空教育隊第9中隊
8	京畿道	京城	1924	中部第98部隊
9	忠清北道	永同	1928	第8航空教育隊
10	全羅南道	済州島	1927	第8航空教育隊第1中隊
11	全羅南道	済州島	1924	中部第98部隊
12	全羅南道	済州島	1924	朝鮮釜山第8航空教育隊第3中隊
13	全羅南道	済州島	1924	朝鮮釜山第8航空教育隊第3中隊
14	全羅南道	麗水	1925	第8航空教育隊第2中隊
15	全羅南道	麗水	1925	第8航空教育隊第3中隊
16	慶尚南道	南海	1924	中部第98部隊吉田（？）隊
17	慶尚南道	陜川	1927	中部第98部隊前津（？）隊
18	慶尚北道	安東	1928	第8航空教育隊
19	咸鏡南道	咸興	1924	航空第8教育教育隊
20	咸鏡南道	咸州	1924	第8航空教育隊第3中隊

出典　国家記録院「日帝強制動員者名簿コレクション」検索結果より作成
http://theme.archives.go.kr/next/collection/viewJapaneseIntro.do

備考
・「兵籍戦時名簿」は1991年に日本政府が韓国政府に引き渡した強制連行関連名簿の一部で、67冊に20,222名分が登載されている。外務部から国家記録院に移管された後、電算化された。
・「動員地」は原本の日本語をハングルに直したものを再度日本語に戻しているため、推測または推測不能なものを含む。特に、小隊長（班長）の名前と思われる部分は、ハングルから推測できる日本の苗字を当てはめただけで、全く確実ではないため、「（？）」を附した。
・姓名の情報（「創氏改名」された名前がハングルで入力）もあるが省略した。

表2　「臨時軍人軍属届」に見られる中部第98部隊（第8航空教育隊）所属の朝鮮人

#	本籍地		出生年度	動員地
	道	郡		
21	京畿道	水原	1924	中部第98部隊
22	京畿道	水原	1925	日本滋賀県神崎郡御園村中部第98部隊
23	京畿道	水原	1924	日本滋賀県中部第576部隊
24	京畿道	楊州	1924	中部576部隊東山（？）隊高安（？）隊
25	京畿道	平澤	1924	日本滋賀県神崎郡御園村中部第98部隊久保田（？）隊
26	京畿道	始興	1924	中部第98部隊
27	京畿道	開豊	1924	中部98部隊
28	京畿道	開豊	1924	中部第98部隊
29	（京畿道）			中部第98部隊
30	忠清南道	大田	1925	日本滋賀県神崎郡御園村中部第98部隊久保田（？）隊
31	忠清南道	青陽	1924	日本滋賀県神崎郡御園村中部第98部隊
32	忠清南道	唐津	1924	日本滋賀県神崎郡御園村中部98部隊
33	忠清南道	論山	1924	中部第98部隊
34	忠清南道	保寧	1924	日本滋賀県八日市町中部98部隊松井（？）隊갈업班
35	忠清南道	公州	1924	日本滋賀県神崎郡御園村中部98部隊
36	忠清北道	丹陽	1924	日本滋賀県神崎郡御園村中部第98部隊
37	忠清北道	堤川	1923	日本滋賀県강화中部第98部隊훤隊
38	忠清北道	清州	1924	中部第98部隊
39	忠清北道	永同	1924	日本滋賀県神崎郡御園村中部第98部隊久保田（？）隊
40	全羅南道	済州島	1924	中部第98部隊
41	全羅南道	済州島	1927	中部第98部隊천隊
42	全羅南道	長興	1923	中部第98部隊
43	全羅南道	務安	1924	中部第98部隊
44	全羅南道	海南	1924	中部98
45	全羅北道	井邑	1923	日本滋賀県神崎郡御園村中部第98部隊東山（？）隊石毛（？）隊
46	全羅北道	淳昌	1924	中部98部隊
47	全羅北道	淳昌	1924	日本滋賀県神崎郡御園村中部98部隊吉田（？）隊
48	慶尚南道	固城	1924	中部第98部隊
49	慶尚北道	金泉	1925	日本滋賀県神崎郡御園村中部98部隊上村（？）隊
50	慶尚北道	義城	1925	中部98部隊吉田（？）隊櫻井（？）隊
51	慶尚北道	栄川	1924	日本滋賀県神崎郡中部98部隊
52	黄海道	遂安	1924	中部第98部隊
53	黄海道	平山	1924	中部第98部隊
54	咸鏡北道	茂山		中部第98部隊吉田（？）隊

出典　表1に同じ。
備考
・「臨時軍人軍属届」も表1の「兵籍戦時名簿」と同様に日本政府から韓国政府に引き渡された名簿の一部で、103冊に46,164名分が登載されている。
・「中部576」も第8航空教育隊の通称号として確認できることから、23番、24番も含めた。
・記載されている創氏改名された名前および本籍地より、25番がKJ氏のデータである。
・その他、表1に同じ。

時名簿」には中隊名の記載が見られ、駐屯していたと考えられる第１中隊から第９中隊までほぼ全て確認できる。

中部第98部隊（第８航空教育隊）には当然ながら多数の日本人兵士もいた[10]。朝鮮人と日本人の比率や、中隊・分隊の分け方などは不明であるが、聞き取り調査でのKJ氏の話によると、朝鮮人だけで編成されていた班（班長だけが日本人）が複数存在していたようである。

航空教育隊に朝鮮人兵士が配属された例としては、奈良航空教育隊の例がこれまで知られている[11]。表１、２を作成する際に利用した国家記録院「日帝強制動員者名簿コレクション」で「航空教育隊」と検索すると、262件がヒットする[12]ので、KJ氏のように徴兵され航空教育隊に配属されたケースはそれなりに多かったことがわかる。

朝鮮軍残務整理部（元朝鮮軍徴兵主任参謀吉田俊隈）作成「朝鮮人志願兵・徴兵の梗概」所収の別表[13]「第九表　昭一九朝鮮現役兵各軍配当区分表」を見ると、1944年の朝鮮からの現役兵合計45,000名の配当先が軍管区と兵種別に出ている。KJ氏は自分の兵科（兵種）は「飛行兵」だったと述べているが、この表によると、「飛行兵」は2050名で、全て第１航空軍に配当されている。先に、第８航空教育隊が第１航空軍の隷下にあったことを確認したことと符合する。

４．KJ氏への聞き取り調査結果概要

次にKJ氏への聞き取り調査結果を見ていく。調査は、2012年８月31日午後13時半から約２時間20分にわたって、KJ氏が居住する平澤市の住民センターの会議室において行われた。調査者は、筆者のほか、委員会調査２課の李宣姈氏ほか１名、山村暁子氏（あすぱる甲賀）である。質問は主に筆者が韓国語で直接行った。質問項目は事前調査に基づき大まかに書き出しておいたが、KJ氏には見せず、自由に話していただいた。以下、話が重複・前後している部分等を時系列に沿って再構成し、KJ氏の述懐内容の概要を□で囲って示した上で、補足説明などを加えていく。なお、地名等、KJ氏が日本語で発言した用語はカタカナで示し、（　　）で漢字表記を補足することとした。〔　　〕は筆者による補足である。

１）出生から徴兵まで

1924年２月５日生まれです。５人兄姉で、末っ子です。〔京畿道平澤市〕彭城邑で生まれて、３歳の時に〔京畿道平澤市〕松炭に引っ越してきて、以来87年ここに住んでいます。13歳で初等学校を出て、卒業してからソウルで就職しました。

1924年生まれで、13歳で初等学校（当時の名称で公立普通学校）を卒業したとすると、６年制なら1930年頃満６歳で入学、卒業は1936年頃と推測される。また学校名は確認しそびれたが、西井里公立普通学校（1922年開校、現・西井里初等学校）と推測される。

ソウルでは、元曉路４街の理髪店で美容師をしていました。共同水道から引いた水でお客さんの髪を洗うんです。でもその店の仕事が３年ぐらいで無くなってしまって、それで仕事の口利きをお願いしていたら、〔朝鮮総督府〕鉄道局の龍山工場に入ることになりました〔元曉路は龍山駅のすぐ近く〕。17歳の時〔1940年頃か〕です。工場長は高等官ですよ。一種の「立身揚名」ですね。

そこでは６ヶ月間ぐらい電気溶接の教育を受けました。溶接工の養成をしていたんです。それで〔技術があったので〕、後に徴兵されたときに兵科が「ヒコウヘイ（飛行兵）」になったのではないかと思います。

そのままそこで機関車の運行や、整備したり手入れしたりする仕事をするはずでしたが、徴兵の年齢になったので、できませんでした。

朝鮮の鉄道経営は、1925年に満鉄から朝鮮総督府直営となり（それ以前も直営の時期あり）、KJ氏が工場に就職した時期は朝鮮総督府直営で、工場の正式名称は「京城工場」であったと思われる[14]。

KJ氏が入ったという「養成所」は、鉄道従事員養成所のことではないかと推測される。朝鮮語新聞『東亞日報』には、鉄道局が鉄道技術者養成のために、従来、鉄道従業員しか入れなかった鉄道従事員養成所を一般に開放し、短期養成課程も含めて生徒を募集している旨が、1938～39年に記事になっている[15]。

２）徴兵と「トクレンタイ」

その龍山工場にいた時に、満で20歳になって徴兵の年齢になり、検査を受け、甲種合格になりました。肺に問題があると出るんですが、陽性ではなく

陰性だったので、徴兵されることになりました。軍隊では寝食を共にするから、すぐ伝染するので、陽性だったらだめですよね。でも、そういう問題がある兵だけ同じ内務班に編成されていました。

徴集される前、特別訓練、トクレンタイ(特錬隊?)で1年訓練を受けました。訓練を受けろという連絡が来て行ったんです。西井里〔の国民学校?〕でトクレンタイとして、召集を受ける前まで1年教育を受けました。

学校を出ていない人は、ノーコータイ(農耕隊)ですよ。ノーコータイも軍人ですが、農業をする軍人。当時、日本人はみな兵隊に取られて女性ばかり残ったから〔朝鮮人が連れて行かれた〕。

召集は1944年11月末頃にされました。召集場所は釜山です。また病院で身体検査を受けました。それで日本に渡りました。

召集されるとき、「武運長久」と書かれた旗を立てて、村中の95戸に見送られました。ノボルキ〔のぼり(旗)のことか〕知ってます? 家族は悲しかったでしょうが、当時、徴兵は義務なので表立って反対はできないですよね。センニンバリ(千人針)は女性がやっていました。当時は「内鮮一体」でしたから。

「トクレンタイ」については、先に考察した通りである。農耕隊については前号に書いたとおりだが、KJ氏はこちらからは何も質問していないのに「学校で教育を受けられなかった人はノーコータイ」と自ら語ったことが印象に残った。

また「武運長久」の話をされたとき、筆者が韓国語での「ムウンチャング」という発音から漢字表記をすぐに思い出せないでいると、自らペンを取り「こうやって書くんですよ」と書いて下さった。

3)八日市へ

釜山で召集されて、そのまま関釜連絡船で日本に渡りました。ナガサキ(長崎)、ヒロシマ(広島)、大阪、ナゴヤ(名古屋)を経てヨウカイチ(八日市)に行きました。ヒロシマでは原子爆弾で焼け野原になっているのを見ました〔行き帰りの記憶が混同していると思われる〕。

上陸したのは下関ではなく、長崎なのかと確認すると、「ナガサキとシモノセキは同じじゃないんですか?」として記憶は曖昧だった。前号で述べたとおり、1945年3月以後、米軍の機雷投下のため下関に入港できなくなったので、渡日時期の確定のために確認したかったのだが、後述するように、八日市到着が2月頃と記憶していることから、関釜連絡船乗船は1月頃と推測されるため、おそらく下関に入港したと思われる。

また、名古屋は、大阪から八日市の途中にはないが確かに行ったかと確認すると、「地理的なことはわからないが名古屋には確かに行った」とのことだった。滋賀県は京都師管区の管轄だが(前号のHK氏所属部隊も京都師管区)、第8航空教育隊が隷属する第51航空師団、第4航空教育団の司令部はいずれも岐阜県にあり、岐阜県を管轄するのが名古屋師管区だったため名古屋に行ったのかもしれない。

4)八日市飛行場での軍隊生活

八日市に着いたのは1945年の2月頃、寒くて右足の指が凍傷になったんです。ビワコ(琵琶湖)から上る水蒸気が凍って落ちてくるんですよ。落ちるとすぐ溶けますけど。体質が冷えているせいもあって、他の人はならなかったけれど、私は足の指が凍傷になりました。当時、〔軍の〕財政状況も悪かったのか、薬もまともに無いんですよ。薬と言えば、あの赤いやつ、アカチンキぐらいで。

4月29日の「天長節」に…〔聞き取れず〕それほど物資が少なかった。

土田昭二著/林えいだい編(2003)によれば、土田氏の12月下旬の日誌に隊員に凍傷患者が出ていることが言及されている。また、特攻隊は「神様扱い」され士気を高めるための酒を含め糧食が多くあてがわれた反面、「地上勤務の整備兵は、一般兵並みの粗末な食事しか与えられていない」と土田氏は回顧している。KJ氏の所属は「地上勤務の整備兵」よりさらに下の、整備の訓練部隊であったので、その待遇は推して知るべしであろう。

一方で、中島隆(1993)によると、第8航空教育隊にKJ氏と同時期に在隊した元兵士(日本人)による、「軍律はもう厳しくされず上官が殴ることも殆どなく、待遇も良かった」「酒、タバコはもちろん、航空兵たちは軍務や学習に追われてその余裕もなかったが、『突撃一番』(コンドーム)から、事後の性病の薬まで内務班で備えられていた」という証言もある。

私たちは靴がゴム底だったんですよ。なぜかとい

うと、飛行機の整備をしようと思えば、機体に上がりますよね。そうすると、普通の編み上げの軍靴だと、靴底に釘が打ってありますよね。それで飛行機の羽だとか何だとか歩いたらだめだから、ゴム底になってるんですよ。

ヒコウヘイ(飛行兵)という兵科は、空軍じゃなくて地上軍です。トッコウタイ(特攻隊)とは別で、整備するだけです。爆撃したりとか、そういうのじゃなくて。私たちが滋賀県ヨウカイチ(八日市)に行ってやっていたのは地上での整備です。トッコウタイが乗る飛行機を手入れする仕事をしていたんですよ。トッコウタイの飛行機を手入れしに山にも行きました。トッコウタイは操縦士も死にますよね。

なんて言うか、幼稚ですよね。軍人精神を注入するとか何とか。ヤンノム〔西洋人への蔑称、朝鮮語〕を「ケトラ」〔不明〕というんですけど。「ケトラ」が上陸するときは、タケヤリ、竹槍で応戦するから鍛錬しろとか。

八日市飛行場と特攻隊との関係は先に述べた通りである。第8航空教育隊は整備の訓練をする部隊であったので、本当に特攻隊が乗る飛行機をKJ氏を含む第8航空教育隊の整備兵が手入れしたのかはわからない。

渡辺守順編『写真集　明治大正昭和　八日市』(国書刊行会)のコピーを持参していたので、八日市飛行場関連の写真を見せると、門の写真は見覚えがあるが、他はよく覚えていないとしながら、「甲式三型戦闘機」の写真を指して、「こういうのを整備していた」と述べた。

一つの内務班は30名程度、朝鮮人だけで編成され、班長だけは日本人でした。宿舎は兵舎が与えられました。他にも同じような編成の班がいくつもありましたが、全部でいくつあったのかはわかりません。

グンジンチョクゴ〔軍人勅諭〕を覚えされられました。覚えないと「気合」を受けましたから。トイレに行くにも言わないといけませんでした。

靴下のような支給品は、家があばら屋で貧しかったので〔朝鮮に〕送りました。ちゃんと届いていたみたいですよ。

「柿谷」という日本名の朝鮮人が印象に残っていて名前を覚えていますが、住所もわからないのでずっと連絡できずにいます。

ときどき休暇を与えられると、何時までには帰ってこいと言われて、近くの民家に行ってみたことはあります。食べ物も買って食べたりしました。皆、若いのに夫を戦争に取られた「生寡婦」(夫と早くに死別した女性)の女性ばかりでしたよ。

先に確認したように、第8航空教育隊(中部第98部隊)に所属していた朝鮮人兵士は、KJ氏を含めて少なくとも50名以上が名簿から確認できる。最大で5000名規模になった(中島伸男2012)という第8航空教育隊のうち、どの程度を朝鮮人が占めたのかはわからないが、表1を見ると所属していた中隊もバラバラであることから、それぞれにKJ氏が言うような朝鮮人だけで編成されていた小隊(班)が複数個あったとすれば、数百人規模になる可能性もある。

聞き取り調査中、朝鮮王朝最後の皇太子であった英親王・李垠が陸軍中将として八日市飛行場を視察したことがあるのを思い出したので、たずねてみると、自分が在隊時には視察はなかったとのことだったが、李垠が中将であったことはご存知だった。後で確認すると、李垠が第一航空軍司令官として八日市飛行場を視察したのは1944年9月のことだった[16]。

5)空襲その他の記憶

以上は、概ねこちらから質問せずに話してくださったことだが、次に、飛行場拡張工事、食糧増産部隊、模型飛行機、掩体壕、そして空襲のことなど、いくつかこちらから質問を投げかけて聞き出した事項についてまとめてみる。

飛行場の拡張工事のことはよく知りません。私が行った時には既に拡張されていたようでした。〔その工事に朝鮮人が従事していたという話は〕聞いたことがありますが、自分たちは軍隊にいたので、〔拡張工事をしている朝鮮人労働者と〕交流などはできませんでした。たぶん徴用された労務者ではないですか?

拡張工事以外にも、御園村で開墾してサツマイモを作っていた朝鮮人の部隊があったと聞いたことがあるので、たずねてみると、それも知らないとのことだった。

飛行機の木製模型を空襲用のダミーでつくったという話を、戦時中に八日市に在住していた別の調査対象者から前日に聞いていたので(次号掲載予定)、知っているかときいてみると、知らないとの

ことだった。また、掩体壕についてもきいてみた。

カクノウコ(格納庫)？　そういうのは、目立つからやらなかったですよね。隠さなきゃならないから。

軍隊はやることが専門化されているので、他の部隊がどんな作業をしているのかも含め、自分が直接に関わったこと以外はわからないということだった。空襲についても記憶になく、空襲警報が出て防空壕に入ったり、入らなければならないときに空を見上げて「死にたいのか」と言われたというような記憶はあるとのことだった。

中島隆(1993)には、八日市空襲の詳しい証言が紹介されている。職員として八日市市史編さんにあたっていた中島隆氏は、空襲に関する聞き取り調査をしながら「軍都であり、箝口令のようなものが敷かれた形跡がある」ことを感じたという。また、「市史編さんの調査時から、当の飛行場、部隊内部については、遠方から炎や黒煙が上がるのが見え、被害も相当あったことは推測されていたものの、隊内でこの空襲を悉さに体験した人はなかなか見つからなかった」としている。

その中で、第8航空教育隊にいた元兵士からようやく証言が得られたとして紹介している。1944年5月に第8航空教育隊に現役入隊、敗戦処理も含めて1945年9月まで八日市にいたというその元兵士は、空襲については「逃げ回っていたようなことで、確かな記憶ではない…」としつつも、次のようなことを述べたという。

艦載機からの銃爆撃は激しく、いたるところで30～40メートルの火柱があがり、飛行場は修羅場と化した。40機ほど実戦配備をしていた飛行機も4、5機を除いて使用不能になった。空襲後、同僚と落下傘を開け持ち、四散した手足や骨、肉などの一部を拾い集めた。周囲の森や山中に隠した飛行機も、半数程度は被弾し、焼失したものも多かった。

これほどの状況であれば、いくら飛行場が広くてもKJ氏が全く記憶していないということがあるだろうか。戦中の「箝口令」の影響のためだろうか。いずれにしても、事前にこの中島隆氏の著作は確認してはいたのだが、KJ氏に対して空襲についてもう一歩突っ込んだ質問ができなかったことが悔やまれる。

6)帰郷

日本には8ヶ月いたことになります。一等兵で星二つでした。最初はただの赤いの、それから二等兵で星一つ、それで一等兵が二つ、上等兵は星三つ。8・15が無くて続いていたら上等兵になったでしょうね。

8月15日に敗戦して特別放送を聞かされましたが、降伏したって言わないんですよ。「休暇を与える」とか、「故郷に帰す」ということでしたが、いつになるかわからないので、私たちは除隊手続きを待たずに慌ただしく八日市を離れました。生き残っただけでも有り難いと。デモをしたり扇動したりするのもいました。

ときどきもらっていた小遣いと、それから毛布やハンゴウ、飯盒などをもらって売ってつくったお金で、75トンの木造船の密船〔ヤミ船〕に乗ってかえりました。誰か船を紹介してくれる人がいたんです。志願兵とか専門学校の学徒兵とか〔ほかの部隊にいた韓国人とも〕と一緒になりました。高射砲部隊にいた母方の従兄弟もいたんですが、その従兄弟は毛布も何も持ち出せなくて、お金がないから、私が用立てしてあげました。

〔第8航空教育隊には9月5日に復員命令が出たらしいがと問うと〕おそらくその前にもう出てしまっていたと思います。当時はもう無秩序でした。

その木造船には70人ぐらい一緒に乗りました。船長は朝鮮人だったと思います。台風が来て対馬島で3日滞留しました。故郷の家に着いたのは、10月の20日を過ぎていたと思います。〔徴兵された人の中では〕早く帰った方だと思います。関釜連絡船で帰った人は年が明けてから帰った人もいますよ。

帰国後、韓国軍には行きませんでした。肺に問題があるというのが検査をすると一応出てくるから、それを言い訳にして。当時、人は消耗品扱いだったから、韓国軍に入っていたら今頃生きてなかったでしょうね。右翼だとか左翼だとか、大変でした。

前号で紹介したHK氏は、8月中に上官が博多まで引率し、秩序が保たれていたと話していたが、KJ氏の場合は「無秩序」で、いつ返してくれるのかわからないから復員命令も待たずに支給品(もしくはそれ以外も)を持ち出して現金に換え、ヤミ船を仕立てて帰国したという。

5．おわりに

KJ 氏は、満89歳の年齢相応に薄れた記憶をたどりながら、聞き取り調査に応じてくれた。しかし途中、靴下を家に送った話をするときは、貧しい家族を残して徴兵されて日本に行ったことが思い出されたのか、涙で言葉を詰まらせた。

聞き取り調査を行ったのが2012年８月で、ちょうど李明博大統領（当時）が独島（竹島）に上陸して日韓間で領土問題や歴史認識問題が改めてクローズアップされていた時期であったこともあり、そのような問題についても話が及んだ。そのとき、「『挺身隊』〔「慰安婦」のことを指している〕、根拠が無いだって？　厳然とあったのに。」と述べられたので、「もしかして八日市にも『慰安所』がありましたか？」と尋ねると、少し間を置いて「八日市は無いですよ。遊郭はあったらしいけど。それも勝手に飛行場の外を出歩けないから知らない。」とだけ述べられた。

先に、中島隆氏による第８航空教育隊の元兵士への聞き取りで、内務班の備品に「突撃一番」や性病薬あったことに言及したが、「軍都」八日市には当然ながら「遊郭」があった（中島隆1993）。一方、「慰安所」というと、中国や東南アジアなど前線や占領地にのみ設置されたように思われがちだが、沖縄はもちろん「内地」においても軍が駐屯するところに「慰安所」はあった。例えば明石清三『木更津基地』（洋泉社、1957年）には、海軍の木更津航空隊に1943年２月に「慰安所」を開設した話が記されている[17]。

八日市に「遊郭」ではなく「慰安所」があったかどうかまで考察することは本稿の範囲を超えるが、たまたま本稿準備中、八日市にあるお寺の住職さんより「慰安婦」のお地蔵さんがあるとの情報を得たこともあり、今後、調べてみたい。いずれにしろ、特に「軍都」における「遊郭」と「慰安所」はそれほど明確に区分できるものではないと考える。朝鮮の「軍都」における「慰安所」と「遊郭」について考察した金栄・庵逧由香は、「軍都」における軍と「遊郭」の関係を戦地に持ち込んだものが「慰安所」であり、軍都における「遊郭」と「慰安所」を単純に分けて捉えることは難しいと指摘している[18]。

この「慰安所」のことや、先に述べた空襲のことなど、本稿をまとめながら、あと一歩踏み込んで聞き取りをしておけばと思う点がいくつかあった。しかし、特に「慰安所」のことなどは、訪問した全ての調査者が女性である中で答えにくいという「空気」を察知して、それ以上質問を紡げなかった。

他の調査者同様、KJ 氏も「この調査の目的は何か？」と何度か確認された。その度、「戦時期の滋賀県について調べているが、当時、滋賀県に連れて来られた韓国の方々にはこれまでお話をお聞きできる機会がなかったから、当時の滋賀県でどんなことがあったか教えていただきたいだけです」とお伝えした。日本軍の軍人であったことは、韓国ではおおっぴらに語りにくいことである。それを、突然訪れた見ず知らずの日本人に、忘れかけていた過去のことを根掘り葉掘り尋ねられるのだから、疑心を抱くのも無理はない。KJ 氏は、今回の調査対象者３名の中でもとりわけそのような「動揺」が感じられた。

ご高齢の中、長時間の聞き取り調査に応じてくれた調査対象者の皆さんに改めて感謝申しあげ、証言してくださったことを無駄せず地域史の再照明に今後も努力したい。

【参考文献】

聖徳中学校郷土研究会編 ,1952,『滋賀縣八日市町史の研究（近代篇）―筏の流れ　第５集』八日市町聖徳中学校

土田昭二著／林えいだい編 ,2003,『特攻日誌』東方出版

中島隆 ,1993,『軍都の轍より―八日市私史近現代抄―』新風舎

中島伸男 ,2008,「『世界のミフネ』航空兵時代」『蒲生野』40

中島伸男 ,2012,「旧陸軍八日市飛行場と布引丘陵掩体壕群」（2012年度第２回人権ゆかりの地フィールドワーク「平和を考える―戦争遺跡が語る」、2012年８月６日、配付資料）

樋口雄一 ,2001,『戦時下朝鮮の民衆と徴兵』総和社

水谷孝信 ,2009,『湖国に模擬原爆が落ちた日』サンライズ

八日市市史編さん委員会 ,1984,『八日市の歴史』八日市市役所

八日市市史編さん委員会 ,1987,『八日市市史　第４巻　近現代』八日市市役所

【註】

1　以下の中部第98部隊および八日市飛行場に関する記述は、特に断りのない限り、八日市市史編さん委員会(1984)、八日市市史編さん委員会(1987)、中島伸男(2012)による。

2　JACAR(アジア歴史資料センター)Ref. C12121380800、「本土配備部隊行動概況表」(防衛省防衛研究所)、「中部軍管区隷下部隊」。

3　北原道子「朝鮮人兵士を主に編成された日本陸軍特設作業部隊・臨時勤務隊について―北海道と樺太の場合」『在日朝鮮人史研究』32(2002年)によると、丘珠飛行場の飛行機の掩体壕づくりをした特設作業隊(北部軍管区隷下)は朝鮮人「兵士」によって編成されていたという。

4　JACAR(アジア歴史資料センター)Ref. C01007715800、昭和14年「陸機密大日記 第1冊 2／2」(防衛省防衛研究所)、所収。

5　JACAR(アジア歴史資料センター)Ref. C01005914200、昭和15年「陸支機密大日記 第4冊第4号 3／3」(防衛省防衛研究所)、所収。

6　JACAR(アジア歴史資料センター)Ref. C12121028300、「航空総軍編制人員表」(防衛省防衛研究所)、所収「第51航空師団」。

7　「八日市飛行場で終戦を迎えた特攻隊員」しがけんバーチャル平和祈念館(http://www.pref.shiga.lg.jp/heiwa/tenji/chiiki_taiken2.html)。

8　土田昭二著／林えいだい編(2003)。土田昭二氏は第4教育飛行隊配属中の1944年9月、特攻要員として訓練を受けるための「特班」に編成され訓練を受け、11月、特攻隊に「血判志願」し、1945年3月、埼玉県の児玉第4教育隊に配属、6月に八日市飛行場を中継して大刀洗飛行場に移り、出撃待機中に敗戦となった。

9　http://theme.archives.go.kr/next/collection/viewJapaneseIntro.do。これらの名簿の解説として、鄭惠瓊(北原道子訳)「韓国内所蔵戦時体制期朝鮮人人的動員関連名簿資料の実態及び活用方法」『在日朝鮮人史研究』40(2010年)、および竹内康人編著『戦時朝鮮人強制労働調査資料集』2(神戸学生青年センター出版部、2012年)。

10　戦友会研究会「戦友会データベース」(http://www.senyuken.jp/database)を調べると、中部第98部隊(第8航空教育隊)の「戦友会」が大阪、名古屋、所在地不明の3つ確認できる。

11　高野真幸編『朝鮮人強制連行・強制労働ガイドブック　資料集1奈良編』みずのわ出版、1998年。

12　通称号(第8航空教育隊の場合「中部98」)で入力されているデータはヒットしないので、実際にはもっと多いと思われる。最も多くヒットするのは、奈良航空教育隊で、90件であった。

13　JACAR(アジア歴史資料センター)Ref. C13070003800、「朝鮮軍関係史料　2／2　一、朝鮮人・志願兵・徴兵の梗概　一、朝鮮に於ける戦争準備　一、対韓交渉の参考」(防衛省防衛研究所)。同表附属の「備考」を読むと、これは配当の計画であって結果ではないようである。

14　朝鮮総督府鐵道局『朝鮮鐵道四十年略史』1940年。

15　「鐵道従業員　一般에도 募集　今春부터　入所者에　鐵道従業員養成所에서」『東亞日報』1938年2月6日。「鐵道技術員短期로養成」『東亞日報』1939年1月11日。

16　李王垠伝記刊行会『英親王李垠伝―李王朝最後の皇太子』共栄書房、2001年。

17　日本軍「慰安婦」問題webサイト制作委員会「日本軍『慰安婦』―忘却への抵抗・未来の責任」(http://fightforjustice.info/)に該当箇所の引用あり。

18金栄・庵逧由香「咸鏡北道の軍都と『慰安所』・『遊郭』」宋連玉・金栄編著『軍隊と性暴力―朝鮮半島の20世紀』現代史料出版、2010年。